アートランダム

韓国系米人ヨン・スン・ミンの言語（アート）

トシダ・ミツオ

第三世界の民族抑圧の状況を批判

ヨン・スン・ミンは、ニューヨークに住むアジア系アメリカ人のアーチスト／アクティビストで、マルチ・メディア・インスタレーションを核に、その活動は広範囲におよんでいる。

彼女が生まれたのは1953年、ちょうど朝鮮戦争が終わった年だ。40年におよぶ日本帝国主義統治から解放された後も、米ソの冷戦のなかで二分化された祖国を離れて、アメリカ合衆国に移住したのは、ミンが7才の時だった。

アメリカの教育システムの中で早いうちから芸術に興味を抱き、カリフォルニア大学バークレー校で修士号を習得し、81年にニューヨークのウィトニー・ミュージアム・インディペンデント・スタディ・プログラム在籍、そのあと84年までオハイオ大学で教鞭をとり、ニューヨークに戻って現在にいたっている。

ヨン・スン・ミンは、自分のことを一・五世の韓国系アメリカ人といっている。つまりこれは子供のうちに移住したため、アメリカ社会にうまく同化し、こちらで生まれた二世たちとより多くの共通点を見つけることができるということだ。こうしたミンの個人的歴史背景やアジア系アメリカ人という社会的立場が、彼女のアートに大きな影響を与えているのは確かなことだ。

ニューヨークに移って以来、エイジアン・アメリカン・アーツ・アライアンスの運営コーディネーターとして活躍しながら、YKU（Young Koreans United）という朝鮮・韓国の政治に対して、進歩的な立場をとっているグループとも交流を始める。YKUは一世中心のグループで、コミュニケーションは主に韓国語で行われていたということもあり、ミンにとってはつらい体験だったようだ。

一年半におよぶYKUとの活動の中で、朝鮮・韓国の歴史と政治に対する興味をいっそう深めていった。「アーチストとして活動し始めた当時は、私の人生に意味を与えるには、芸術家という肩書きだけで充分だと思っていたけれど、ニューヨークに移ってからはそれでは充分ではなく、自分自身についてもっと深く掘り下げていかねばならなかった」とミンは言っている。

YKUを通して韓国のミン・ジュン・アートと出会ったことは、彼女にとって大きな出来事であった。ミン・ジュン（人々の）アートとは、80年代に韓国で広まった文芸・芸術運動で、近代化＝西欧化＝資本主義化という韓国政府の行政が生み落とした数々の抑圧的な社会問題に対応しながら、新しい文化の構築を試みている。

88年にアーチスト・スペースでミン・ジュン・アートのショーがあった時、ミンはビデオとフィルム展示の構成を手助けした。その翌年には韓国を訪れ、この運動の芸術家たちと交友をいっそう深めている。

ミンの芸術作品は、第三世界で起こっている民族的・政治的抑圧の状況に対する鋭い分析と批判を呈示している。南アフリカの反人種差別運動やパレスチナ人解放運動といった問題にミンが共鳴するのは、彼女の母国自体が同様な問題と戦ってきているからだし、韓国系アメリカ人としてアメリカ社会の中での人種差別問題やアジア人の自己同一性とその主体化といったことが、彼女の芸術の軸になっているといえる。

初期の〝Make Me〟という作品は、4枚の写真に彼女自身の異なった身ぶりと表情が写っていて、それぞれのイメージの上に"Model Minority""Exotic Emigrant""Assimilated Alien""Objectified Other"という言葉が書かれている。

ミンによれば、この国におけるアジア系アメリカ人の社会的地位は曖昧で、何代にも渡ってこの国に定住している者でさえ、アジア系ということで〝永遠の他者〟として見られるし、同時にHonorary Whiteだとか Model Minorityといった一瞬聞こえのよい呼ばれ方もするが、結局はアジア人を社会の中心の外側に位置づけるための規範化の言葉でしかないのだという。

ミンの作品の中でも Half Home"というインスタレーションは、もっとも私的な経験をもとに作られた作品で、壁に文章、イメージ、オブジェが並べられ"Heart Land""Memory""Mother Tongue""History""Real Estate"といった見出しが書かれている。

ある文章は自らに問いかけるように"She hears a voice from a devasted village: if I go, who make home for me? where I go? where I find home? where life?と書かれている。

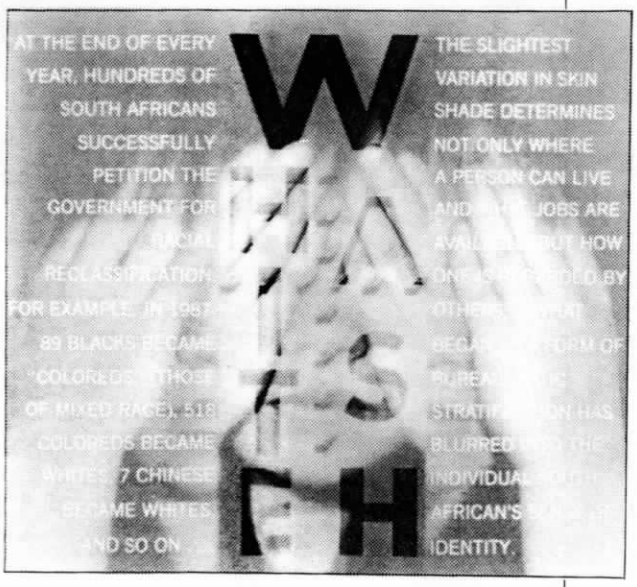
ミンは文化が一つの孤立した現象だといった考え方に挑戦し、固定化された文化の境界線の虚構性をあばきながら、自らの自己同一性の不確定性を探求している。

写真にある"Colorblind"という作品は、南アフリカの人種差別政策の内在化が進んで生み出した矛盾―非白人が毎年、自分たちを白人として認定してもらうべく申請を出しているという内容の文が書かれている。

作品の中央には、色盲検査のチャートのような構図で縦書きに"White Wash"（白人化）と書かれている。そして黒人でも白人でもない〝黄色人種〟の作家自身が手で目を覆い、見ないふりを演じることでこの作品で問われている物質的で概念的な問題の関係性がより強調されている。

ヨン・スン・ミンには他にも多くのすぐれた作品があるが、ここでは彼女の芸術活動の基本的アプローチを紹介することに努めた。6月11日から8月までブロンクス・ミュージアムで個展をすることが決まっている。

◆



Young Soon Min "Colorblind"

ターンテーブル

ートな指の温もりがにじむ。

なにを、こんなに愛おしん

アリスタリーホールで行われたモーツアルト没後200年

うな血の通った音だった。

なぜか、そこに、これを作

それは楽しい想像だった。内田光子はそう思わせるほど